

14031	言語と文化 A	109
14032	言語と文化 B	109
14041	沖縄学	116
14051	芸術とキャリアデザイン I	105～106

共通教育科目**●共通基礎科目**

14061	アートマネジメント概論	104
15121	一般芸術学	美術工芸学部シラバスに掲載
15122	美学	95
15123	現代芸術概論	96
16122	民族音楽学概論	98
15131	日本美術史	美術工芸学部シラバスに掲載
16131	日本・東洋音楽史概論	99
15132	東洋美術史	美術工芸学部シラバスに掲載
16132	西洋音楽史概論	100
15133	西洋美術史 A	美術工芸学部シラバスに掲載
15134	西洋美術史 B	美術工芸学部シラバスに掲載
15135	沖縄美術工芸史	117
15136	美術史	97
16141	琉球芸能文化論	118
16905	演劇概論	(本年度休講) 103
52501	ポピュラー音楽論	102

●外国語科目

17111	英語 I (A) ～ (E)	7～12
17112	英語 II (A) ～ (E)	13～18
17113	英語 III	19
17114	英語 IV (A) (B)	20～21
17115	英語 V	22
17116	英語 VI	23
17161	英語特演 I	24
17162	英語特演 II	25
17121	独語 I (A) (B)	26～27
17122	独語 II (A) (B)	28～29
17123	独語 III	30
17124	独語 IV	31
17125	独語 V	32
17126	独語 VI	33

科目コード	授業科目名	単位数・学期	受講年次	授業区分	担当教員名
14061	アートマネジメント概論	2単位 後期	1～4	講義	谷本 裕・神谷 武史 仲嶺 絵里奈(非) 小越 友也(非)

■テーマ 社会の中の芸術を考える

■授業の概要

近年、社会における芸術の役割は少しずつ拡大してきた。芸術文化そのものの価値に加え、例えば人と人を結びつける芸術の力が注目を集めるようになってきている。そのような中、芸術大学に在籍する者が、芸術と社会を結び付ける「アートマネジメント」、それと関わりの深い文化政策について学ぶ必要性は極めて高い。この講義では、各担当教員の実務経験を活かして、音楽・芸能と美術工芸の両分野、あるいは「理論」「歴史」「実践」の三つの研究領域を往還し、多様なテーマを取り上げる。

■到達目標

- ・芸術に関わる者が、芸術・文化活動を続けていく上で必要な基礎的な知識と方法論を習得する。
- ・日本や海外のアートマネジメントの展開と現状、沖縄における実践例を理解する。
- ・現代社会においてアートマネジメントがどんな役割を果たせるのか、その可能性と課題について考える。

■授業計画・方法

- 1 ガイダンス：芸術と社会（著作権を主軸に）
- 2 日本の文化政策（行政編）
- 3 日本の文化政策（民間・メセナ編）
- 4 戦後沖縄米軍占領下における文化行政
- 5 沖縄における文化行政
- 6 博物館とアートマネジメント
- 7 アートマネジメント実務
- 8 社会と芸術作品 そしてアーティストとは
- 9 公立ホールの事業 劇場の設備と仕事
- 10 公立ホールの事業 がらまんホールの事例
- 11 公立ホールの事業 教育・アウトリーチ
- 12 公立ホールの事業 アーティストインタビュー
- 13 クラシック音楽のアートマネジメント
- 14 琉球芸能・郷土芸能とアートマネジメント
- 15 アートマネジメント概念の拡大（社会包摂）

※定期試験は実施しない

■履修上の留意点（授業以外の学習方法を含む）

- ・ふだんから、自分の専門領域における様々な芸術活動、社会における芸術家の活動に興味関心を持つように心掛け、講義で取り上げられるテーマについて、できるだけ事前学習しておくこと。
- ・講義で配布した資料は熟読すること。また授業で取り上げられた参考文献にあたり、また芸術関連事業を調べるなどし、将来の自らの活動領域の確認とその拡大を図ること。

■成績評価の方法・基準

□方法

- ・授業への積極的参加（40%）、コメントペーパー（10%）、期末レポート（50%）により総合的に判断し、評価する。

□基準

- ・到達目標を観点として、履修規程に定める「授業科目の成績評価基準」に則り評価する。
- ・アーツマネジメントの展開や現状について説明することができるか。
- ・アート及びアーツマネジメントが社会に果たす役割について、各自の芸術文化活動と重ね合わせてその可能性と課題を分析することができるか。

■教科書・参考文献（資料）等

講義ごとに、必要に応じて配布、または指定する。

科目コード	授業科目名	単位数・学期	受講年次	授業区分	担当教員名
15122	美学	2 単位 前期	1～2	講義	喜屋武 盛也

■テーマ 美学の歴史と諸問題

■授業の概要

美学は18世紀に成立した学問であるが、美についての議論、および今日の〈芸術〉に相当する領域についての議論は古代から存在しており、かかる議論の蓄積をもとに美学という学問が成立したと言える。本講義では、そうした西洋美学の歴史的構造を軸に据えて、様々なテキストを紹介する。

■到達目標

- ・西洋美学の主要概念や歴史の大枠を把握し、それを踏まえた思考と記述ができるようになる。

■授業計画・方法

1. ガイダンス／イントロダクション
2. プラトン（「ヒippias（大）」）
3. プラトン（「パイドロス」）
4. アリストテレス（「詩学」）
5. プロティノス／ルネサンスの理論家たち
6. ヴィンケルマン／バウムガルテン
7. デイドロ／ルソー
8. カント（「判断力批判」）
9. ゲーテ（「ドイツの建築」、「色彩論」）／シラー（「カリアス書簡」）
10. ヘーゲル（「美学講義」）
11. ニーチェ（「悲劇の誕生」）
12. ハンスリック（「音楽美論」）／フィードラー（芸術活動の起源）
13. クローチェ（「美学」）／ハイデッガー（「芸術作品の根源」）
14. ベンヤミン（「複製技術時代の芸術作品」）
15. 回顧と展望／定期試験

■履修上の留意点（授業以外の学習方法を含む）

・入門的な講義ではあるが、十全に理解するためには理論的な関心に基づく読書が必要である。紹介したテキスト、あるいは関連があると思われるテキストを自ら進んで紐解くこと。

■成績評価の方法・基準

□方法 学期末の試験（100％）

□基準 到達目標を観点として、履修規程に定める「授業科目の成績評価基準」に則り評価する。

■教科書・参考文献（資料）等

□教科書 なし

□テキスト なし（資料を配布する）

□参考文献 はじめに手に取る一冊としては、佐々木健一『美学への招待』（中公新書、701.1/Sa75）を推薦する。美学および美学史の諸相については、佐々木健一『美学辞典』（東京大学出版会、701.1/Sa75）、小田部胤久『西洋美学史』（東京大学出版会、701.1/081）、今道友信（編）『西洋美学のエッセンス』（ペリかん社、701.1/Se19）を、基本文献を紹介したものとしては、『芸術理論古典文献アンソロジー 西洋篇』（幻冬舎、701/G32）を挙げる。現代英米美学の把握には、R・ステッカー『分析美学入門』（勁草書房）が有益。

科目コード	授業科目名	単位数・学期	受講年次	授業区分	担当教員名
15123	現代芸術概論	2単位 前期	1～2	講義	土屋 誠一

■**テーマ** 諸芸術を通じ「現代」という時代を考える。

■授業の概要

現代の芸術は、しばしば語られるように横断的かつ異種混交的な様相を呈している。高級文化と大衆文化の階層性も既に溶解し、インターネットなどの今日の情報環境を下部構造として、多種雑多な「表現」が溢れ返っている現状である。そのような今日の現況において、「芸術」はいかなる位置を占めているのか、そして、今日における「芸術」とは、そもそもいかなるものであるのか。本科目では、美術を中心として、写真、映画、建築、文学、音楽、サブカルチャー etc. といった、様々なジャンルの現状を概観し、現代の思想や社会環境との関わりを差し挟みつつ、今日の「芸術」を把握するとともに、「現代」の諸問題を理解することを目的とする。なお、講義内容は、担当教員の美術を中心とした批評家としての実務経験をふんだんに活用するものとなる。

■到達目標

- ・「ポストモダン」の時代概念を通じて、現代の諸芸術の問題を理解する。

■授業計画・方法

基本的には、下記のようなテーマをもとに講義を進めていくが、科目の本旨が「現代」にあるため、担当教員の批評家としての実務経験に基づき、講義の過程で生じた最新のトピックを反映させていくなど、いわば実践的な授業を予定している。したがって、必ずしもこの順序で進むとは限らない。また、講義全体を通じて「ポストモダン」という時代概念を軸として、芸術作品を読み解いていくこととする。

1. 「現代」の「芸術」とは
2. 「ポストモダン」とは何か（理論編）
3. 「ポストモダン」とは何か（応用編）
4. 現代美術の現況（紹介編）
5. 現代美術の現況（分析編）
6. 都市と建築 デザインの諸相
7. 映像メディアとその表現
8. 情報環境と表現（紹介編）
9. 情報環境と表現（分析編）
10. まんがとアニメの歴史と表現
11. おたく化する世界
12. グローバリゼーションと芸術（紹介編）
13. グローバリゼーションと芸術（分析編）
14. 現代における芸術の可能性（理論編）
15. 現代における芸術の可能性（理論編）

※定期試験は実施しない。

■履修上の留意点（授業以外の学習方法を含む）

- ・ただ受動的に漫然と話を聞くだけならば、受講しても無意味である。
- ・現代を考えるために必要な話題を、講義中に様々なかたちで提示していくので、そこから各自の関心に応じて主体的に問題意識を汲み取って、主体的な予習復習に役立てて欲しい。

■成績評価の方法・基準

□**方法** 受講態度（20%）、学期末レポート（80%）

□**基準** 到達目標を観点として、履修規程に定める「授業科目の成績評価基準」に則り評価する。

■教科書・参考文献（資料）等

□**教科書** 特になし

□**テキスト** 授業内で必要に応じて紹介する

□**参考文献** スチュアート・シム『ポストモダンの50人』（青土社、2015年）

科目コード	授業科目名	単位数・学期	受講年次	授業区分	担当教員名
16122	民族音楽学概論	2単位 前期	1～2	講義	小西 潤子

■テーマ 音楽文化の多様性を知る

■授業概要

民族音楽学的な立場から、音楽の概念と音楽を支える社会のしくみについて整理をした上で、わたしたちの身近な音楽や世界のさまざまな音楽の事例を視聴覚教材によって紹介しつつ、それぞれの相違点と共通点を明らかにする。また、地域社会における実践活動例を紹介し、音楽文化の多様性への理解と異文化交流への関心を促す。

■到達目標

- ・音や音楽を多角的かつ動的にとらえる見方について学ぶ。
- ・グローバルとローカルなど、現代社会の諸側面を音楽から理解する。
- ・音楽および芸術を通して、いかに社会と接点をもっていくかを考えるための基礎的能力を養う。

■授業計画・方法

1. 音と音楽の境界
2. 自らの音楽体験と基層文化
3. 音楽を通じての異文化理解の可能性と限界
4. 西洋中心主義と比較音楽学
5. 「民族音楽」の発見と民族誌的記述
6. 民族音楽学の実践的理解とフィールドワーク
8. さまざまな楽譜と音楽の伝承
9. 音楽情報と保存
10. サウンドスケープ論の概要
11. 音と音楽のデザイン
12. 環境学としての音響生態学
13. 音楽をめぐるローカルとグローバル
14. フェスティバルに見る音楽の創造的発展
15. 総括

※定期試験は実施しない。

■履修上の留意点（授業以外の学習方法を含む）

- ・積極的に発言や質問をすること。
- ・質問を投げかけたときには自分の意見を述べること。
- ・授業内容にしたがって、図書館や音楽資料管理室の文献、音源、映像資料を使って、各自予習復習をすること。

■成績評価の方法・基準

□方法 授業内のミニレポート（80%）、授業への取り組み（20%）

□基準 到達目標を観点として、履修規程に定める「授業科目の成績評価基準」に則り評価する。
学習意欲や主体的な取り組みが見られるか。関心や理解の深まりが見られるか。

■教科書・参考文献（作品）等

□教科書

- ・指定なし。

□参考文献（作品）

- ・その都度紹介する。

科目コード	授業科目名	単位数・学期	受講年次	授業区分	担当教員名
16131	日本・東洋音楽史概論	2単位 前期	1～2	講義	高瀬 澄子

■テーマ 日本とアジアの伝統音楽

■授業の概要

日本の伝統音楽については、各種目の成立時代順に概観する。アジアの伝統音楽については、地域ごとに概観する。

■到達目標

- ・日本の伝統音楽の各種目について、その特色と歴史的背景を理解していること。
- ・アジアの各地域の伝統音楽について、その特色と文化的背景を理解していること。
- ・日本とアジアの伝統音楽について、主体的関心を持つこと。
- ・理解したことや感じたことを、文章によって適切に他者に説明できること。

■授業計画・方法

- | | |
|----------------------------|----------------------------|
| 1. オリエンテーション（授業の目的と対象について） | 9. アジアの伝統音楽2（東南アジア：インドネシア） |
| 2. 日本の伝統音楽1（雅楽） | 10. アジアの伝統音楽3（南アジア：インド） |
| 3. 日本の伝統音楽2（能楽） | 11. アジアの伝統音楽4（西アジア：トルコ） |
| 4. 日本の伝統音楽3（地歌・箏曲・尺八楽） | 12. アジアの伝統音楽5（中央ユーラシア） |
| 5. 日本の伝統音楽4（人形浄瑠璃） | 13. 日本の伝統音楽7（沖縄・アイヌ） |
| 6. 日本の伝統音楽5（歌舞伎） | 14. 日本の伝統音楽8（近代・現代） |
| 7. 日本の伝統音楽6（民謡・民俗芸能） | 15. 日本とアジアの伝統音楽に関する総括 |
| 8. アジアの伝統音楽1（東アジア：中国） | および定期試験 |

■履修上の留意点（授業以外の学習方法を含む）

- ・平成29年度以前入学者の履修科目である。
- ・毎回の授業で、前回の授業の内容を問う小テストを行うので、前回の授業について復習しておくこと。
- ・試験の詳細については授業中に予告するので、各自、参考資料を探し、準備しておくこと。

■成績評価の方法・基準

□方法

- ・平常点（20%）、定期試験（80%）。
- ・平常点は、小テストの提出状況について評価する。定期試験は、解答式と論述式を併用し、伝統音楽の時代と地域に関する基本的理解、主体的関心、文章構成力等について総合的に評価する。

□基準

到達目標を観点として、履修規程に定める「授業科目の成績評価基準」に則り評価する。

■教科書・参考文献（資料）等

□教科書：適宜プリントを配布する。

□テキスト：適宜プリントを配布する。

□参考文献

月溪恒子『日本音楽との出会い 日本音楽の歴史と理論』東京堂出版、2010年。

柘植元一・植村幸生編『アジア音楽史』音楽之友社、1996年。

科目コード	授業科目名	単位数・学期	受講年次	授業区分	担当教員名
16132	西洋音楽史概論	2単位 前期	1～2	講義	三島 わかな（非）

■テーマ 「響きの可能性」を歴史的にたどってみよう。

～声の音楽から器楽そして、さらなる多様性をもとめて～

■授業の概要

- ・中世～近世～近代～現代の欧州ならびに米国そしてアジア諸国の音楽作品を歴史的に概観する。
- ・各回のテーマに関する音楽作品を鑑賞し、その背景（社会制度と享受者、創作理念、作品様式）を解説する。
- ・作品ごとに、時代様式と個人様式について解説する。

■到達目標

- ・欧州ならびに米国そしてアジア諸国の音楽作品の様式的特色を理解できる。
- ・欧州ならびに米国そしてアジア諸国の音楽作品が成立した時代性を理解できる。
- ・音楽作品の歴史的展開を俯瞰し、「西欧諸国」および「非西欧諸国」との関係性について考えを深めることができる。
- ・近代以降の日本や沖縄における音楽創作の状況や、創作史における「洋楽」の意義について考えることができる。

■授業計画・方法

1. ガイダンス：「西洋音楽」および「外来音楽」の定義と時代区分法。本講義の目的と授業運営、評価方法の確認。
2. 中世・キリスト教（カトリック）の音楽
3. 中世・世俗音楽
4. ルネサンスの音楽
5. 日本人と「西洋音楽」との出会い、琉球人と「西洋音楽」との出会い
6. バロック時代・イタリアオペラと興行化
7. バロック時代・器楽の台頭
8. 古典派の音楽
9. ロマン派の音楽(1) ドイツ語圏
10. ロマン派の音楽(2) イタリア語圏、フランス語圏
11. 19世紀後半～20世紀前半(1) 東欧・北欧の動向、帝政ロシア崩壊とその後の動き
12. 19世紀後半～20世紀前半(3) オリエンタリズム、ジャポニズム
13. 近代日本における「洋楽」の展開
14. 20世紀後半の多様性
15. 授業のまとめ及び期末試験

■履修上の留意点（授業以外の学習方法を含む）

- ・平成29年度以前入学者の履修科目である。
- ・作品を聴取しながら毎授業のテーマについて考えるので、出席が前提である。
- ・初回授業までに、以下に紹介する参考文献の「はじめに」および「第2章」を熟読しておくこと。
- ・次回の授業のテーマに関連する学習は、以下に紹介する参考文献の当該章を事前に読んでおくこと。

■成績評価の方法・基準

□方法 平常点30％（授業への積極的な参加、教員からの発問に対する発言、コメントペーパーの提出状況）
学期末試験70％
以上を総合して評価する。

□基準 到達目標を観点として、履修規程に定める「授業科目の成績評価基準」に則り評価する。

■教科書・参考文献（資料）等

□教科書 特になし。

□テキスト 毎授業時にテーマに関するレジュメや資料を配布する。

□参考文献 柴田南雄『音楽史と音楽論（改訂版）』（財）放送大学教育振興会、2004〔1988〕（定価 ￥1602＋税）
柴田南雄『音楽史と音楽論（岩波現代文庫）』岩波書店、2014（定価 ￥1200＋税）

科目番号	授業科目名	単位数・学期	受講年次	授業区分	担当教員名
15135	沖縄美術工芸史	2単位 後期	1～2	講義	小林 純子

■テーマ 沖縄美術工芸史の基礎知識

■授業概要

琉球・沖縄では、その歴史と風土を反映し、独特の造形と美意識が育まれてきました。残念ながら沖縄戦で文化財の多くが失われましたが、遺された作品や戦前の写真、これまでの研究成果によって、その概略を知ることができます。担当教員の実務経験を活かして、古琉球時代から現代に至るまでの、さまざまな美術工芸の歴史と特色を講義します。

■到達目標

- ・沖縄美術工芸史について基礎的な知識が備わり、作品を観察して造形的特徴を見出すことができる。
- ・沖縄美術工芸の歴史的背景、図像、技法等について文献を調査し、正確な情報を得ることができる。
- ・沖縄美術工芸史について、情報を整理し、さらに自分の意見を加味して、合理的な論述ができる。

■授業計画・方法

1. 沖縄の風土と美術工芸
2. 古琉球の漆芸
3. グスクと石造彫刻
4. 荒焼と上焼の系譜
5. 王都首里の織物
6. 宮廷画家の中国留学とその作品
7. 貝摺奉行所と近世漆器
8. 壺屋焼
9. 紅型の美
10. 島々の織物
11. 沖縄工芸の近代
12. 戦前・戦後の絵画
13. 工芸の復興と展開
14. 現代沖縄の美術工芸
15. まとめ。

定期試験は実施しない。

■履修上の留意点（授業以外の学習方法を含む）

- ・授業の前に教科書の該当箇所を読んでくこと。
 - ・琉球・沖縄史の基礎知識が必要となるので、自習してくることが望ましい。
- なお、レポート作成のために、美術館や博物館の入場料が必要になる場合があります。

■成績評価の方法・基準

□方法 平常点（20%）、コメントペーパー（20%）、学期末レポート（60%）を評価の対象とします。毎回の授業時間内に、その日の授業内容に関するコメントペーパーを書いてもらいます。また学期末にレポートを課します（詳細は授業中に知らせる）。

□基準 到達目標を観点として、履修規程に定める「授業科目の成績評価基準」に則り評価します。

■教科書・参考文献（作品）等

□教科書 宮城篤正監修『すぐわかる沖縄の美術』東京美術、2,310円

学期始めに大学に特設される販売所で購入できます。また県内大手書店、ネット書店でも購入可能。

科目コード	授業科目名	単位数・学期	受講年次	授業区分	担当教員名
15136	美術史	2単位 後期	1～2	講義	土屋 誠一（コーディネーター） 上間 かな恵(非) 小林 正秀(非) 鶴田 大(非) 中島 アリサ(非)

■テーマ トピックからひも解く美術史

■授業の概要

本科目では、「美術史」といえども、通史的なアプローチは行わない。むしろ、美術史（特に近現代）上で重要なトピックを各担当教員が提示し、それを受講生が自らの制作や研究のためのヒントとすることを目的とする。各担当教員の実務経験を活かした応用可能な事例を含む内容を講ずるので、それを基盤として各受講者が役立てることを期待するものである。

■到達目標

- ・各担当教員が提示する美術史上の重要なトピックを理解すること。

■授業計画・方法

1. オリエンテーション／美術について考える基本的態度 [土屋]
2. 戦争・平和と美術 (1) 「戦争画」とは／佐喜眞美術館の成り立ちから「戦争・平和と美術」をみる [上間]
3. 戦争・平和と美術 (2) 描かれた戦争と人間 佐喜眞美術館コレクションを通して考える
4. 戦争・平和と美術 (3) 「平和教育」に美術ができること、その問題点と可能性
5. 『美術史』成立期の書道と文学 (1) 東アジア伝統美術としての書 [鶴田]
6. 『美術史』成立期の書道と文学 (2) 前近代の物語絵から近代の歴史画へ
7. 『美術史』成立期の書道と文学 (3) 『美術史』システムと伝統的美術観の行方
8. 都市の近代化と美術 (1) 時代背景 [中島]
9. 都市の近代化と美術 (2) 主題
10. 都市の近代化と美術 (3) パリと芸術家たち
11. 20 世紀 - 音楽と美術の共鳴／照応 (1) John Cage と未来派、ダダイスム [小林]
12. 20 世紀 - 音楽と美術の共鳴／照応 (2) 武満徹と図形楽譜、小野洋子とコンセプチュアル・アート
13. 20 世紀 - 音楽と美術の共鳴／照応 (3) Brian Eno / ダムタイプとライト・アート、ビデオ・アート
14. 大衆文化と美術 (1) 基本概念 [土屋]
15. 大衆文化と美術 (2) 「美術」と「大衆文化」との抗争

※授業担当者の順序は上記のとおりではない。

※定期試験は実施しない。

※土屋、上間、鶴田、中島の授業は、博物館等での実務経験を活かして受講者の実践に資するものである。

■履修上の留意点（授業以外の学習方法を含む）

- ・授業で話された内容を自分の問題として吟味し、しっかりと復習すること。

■成績評価の方法・基準

□方法 平常点（50%）、期末レポート（50%）

□基準 到達目標を観点として、履修規程に定める「授業科目の成績評価基準」に則り評価する。

■教科書・参考文献（資料）等

□教科書 特になし

□テキスト 特になし

□参考文献

ヴァーノン・ハイド・マイナー『美術史の歴史』ブリュッケ、2003（開架一般 702.01/Mi46）

ジョン・A・ウォーカー、サラ・チャップリン『ヴィジュアル・カルチャー入門』晃洋書房、2001（開架一般 701/Wa）

ほか、授業内で都度紹介する。

科目コード	授業科目名	単位数・学期	受講年次	授業区分	担当教員名
16141	琉球芸能文化論	2単位 後期	1～2	講義	長嶺 亮子（非） 遠藤 美奈（非）

■テーマ 琉球（沖縄）芸能の文化を概観する。

■授業概要

琉球芸能の基本構成を理解した上で、宮廷芸能の歴史、中国や日本本土との芸能の交流、琉球王国崩壊以降の新しい芸能、各地の祭祀や民俗芸能の諸相について概観する。また、ポピュラー音楽や沖縄系移民が移住先に伝えた芸能などを多面的に紹介する。

■達成目標

- ・琉球芸能の特色と、芸能に関わる歴史・文化・社会的背景を理解する。
- ・奄美、沖縄のさまざまな地域の(民俗)芸能を理解し、その特徴について説明できることを目指す。

■授業計画・方法

1. オリエンテーション、琉球芸能とは
2. 琉球音楽の基本構成、ポピュラー音楽への展開
3. 宮廷芸能
4. 琉球と中国の芸能
5. 琉球と日本の芸能、江戸上り
6. 廃藩置県後の芸能
7. 踊りワークショップ
8. 沖縄移民と芸能
9. 民俗芸能を概観するために
10. 島々の民俗芸能（沖縄本島）
11. 島々の民俗芸能（宮古諸島）
12. 島々の民俗芸能（八重山諸島）
13. 島々の民俗芸能（奄美諸島）
14. 琉球芸能を振り返る
15. 定期試験

■履修上の留意点（授業以外の学習方法を含む）

- ・ アジアにおける沖縄の地理、南西諸島（奄美・沖縄・先島・大東）の地図、沖縄県内各市町村の位置を把握しておくこと。
- ・ 履修者の住む地域や各家庭の風習などを注意深く観察しておくこと。
- ・ 学内外で上演される琉球芸能の公演のほか、県内各地の年中行事など、芸能が行われる現場に足を運んで欲しい。

■成績評価の方法・基準

□方法 平常点（30%）、試験（70%）

□基準 到達目標を寒天として、履修規定に定める「授業科目の成績評価基準」に則り評価する。

■教科書・参考文献（作品）等

□教科書：特になし。授業毎に資料を配布する。

□テキスト：授業毎に資料を配布する。

□参考文献：金城厚『沖縄音楽入門』音楽之友社、2006年。その他、授業毎に各テーマにあわせて紹介する。

科目コード	授業科目名	単位数・学期	受講年次	授業区分	担当教員名
16905	演劇概論	2単位 前期 (集中)	1～2	講義	田村 容子

■テーマ 二〇世紀の中国演劇史を概観し、東アジアの舞台芸術について考える

■授業の概要

中国演劇に関する基礎知識を身につけ、とくに二〇世紀の京劇史を学ぶ。
中国演劇に描かれる女性像について、ジェンダーの視点から考察する。

■到達目標

- ・中国演劇の特徴を理解し、日本の舞台芸術と比較することを通して、東アジアの舞台芸術について考える。
- ・中国演劇に見られる思考の様式を知り、その歴史的・社会的な文脈を理解する。

■授業計画・方法

1. ガイダンス／中国演劇入門
2. 中国と日本の演劇史
3. 崑曲と京劇
4. 男旦と女優
5. 作品鑑賞（『貴妃醉酒』）
6. 中国演劇の現代化
7. 中国演劇と日本
8. 二〇世紀の中国演劇に見られる日本人像
9. 中国の戦争映画に見られる日本人像
10. 作品鑑賞（『紅灯記』）
11. 京劇の中の女性像
12. 中国演劇における戦闘する女性像
13. 紅い革命バレエの系譜
14. 作品鑑賞（『紅色娘子軍』）
15. 定期試験／講義のまとめ（男旦からモダンガールへ）

■履修上の留意点（授業以外の学習方法を含む）

- ・講義で参照した参考文献や映像資料に目を通し、紹介された作品やその歴史背景を理解すること。

■成績評価の方法・基準

- 方法 平常点（60%）、定期試験（40%）の内容で総合的に判断する。「平常点」は、授業への参加状況と毎回のコメントペーパーの内容により総合的に判断する。
- 基準 到達目標を観点として、履修規程に定める「授業科目の成績評価基準」に則り評価する。

■教科書・参考文献（資料）等

- 教科書：なし、必要に応じてプリントを配布、映像資料を上映する。
- 参考文献：田村容子『男旦（おんながた）とモダンガール 二〇世紀中国における京劇の現代化』中国文庫、二〇一九年

科目コード	授業科目名	単位数・学期	受講年次	授業区分	担当教員名
52501	ポピュラー音楽論	2単位 後期	1～2	講義	久万田 晋

■テーマ 世界のポピュラー音楽史を概観する。

■授業概要

世界のポピュラー音楽の歴史、音楽的諸特徴、その社会との関係について理解を深める。

ポピュラー音楽を、市場経済、マスメディア、大衆社会がつくりだした二十世紀特有の現象ととらえ、主に北米（含イギリス）、中米、南米（ラテン諸国）、日本・沖縄のポピュラー音楽について、さまざまな視点から論じてゆく。

■到達目標

- ・各時代、各地域のポピュラー音楽を、音楽的特徴や音楽家だけでなく、その背景となる歴史的展開、社会文化状況も併せて理解する。

■授業計画・方法

1. オリエンテーション（1回）
2. 初期のジャズ、ブルース、スイング・ジャズ
3. モダン・ジャズ、リズム&ブルース
4. ソウル、ファンク、ディスコ、ラップミュージック
5. ブルーグラス、フォークソング
6. ロッキンロール、ロック
7. ロックの発展形
8. ラテン音楽1 キューバ、カリブ
9. ラテン音楽2 ブラジルその他
10. 戦前日本の流行歌
11. 戦後日本の流行歌（ムード歌謡、演歌）
12. 70年代以降のアイドル歌謡曲
13. 沖縄の新民謡
14. 沖縄ポップの現在
15. 全体のまとめ、試験

■履修上の留意点（授業以外の学習方法を含む）

- ・受講生は毎回の講義で取り上げられるポピュラー音楽についてできるだけ事前に学習しておくこと。
- ・講義で取り上げられた参考文献や音源、映像に目を通して復習すること。

■成績評価の方法・基準

□方法 日常の出席状況・授業態度（50%）と学期末試験（50%）の両方にもとづいて評価する。

□基準 到達目標を観点として、履修規程に定める「授業科目の成績評価基準」に則り評価する。

世界のポピュラー音楽とそれを生み出した文化・社会状況について十分な理解ができているかどうか。
自分自身の演奏や創作意識と各ジャンルのポピュラー音楽との関係が適切に把握できているかどうか。

■教科書・参考文献（作品）等

□教科書：なし。必要に応じてプリントを授業で配付する。

□参考文献（作品）

- ・中村とうよう『ポピュラー音楽の世紀』岩波書店、1999（岩波新書）。
- ・森正人『大衆音楽史——ジャズ、ロックからヒップ・ホップまで』中央公論新社、2008（中公新書）。